

Erich Kästner
エーリヒ・ケストナーについて

9 9 K 1 0 9 7

張 潤

目次

1 . 作家エーリヒ・ケストナー	1
2 . ドレスデンに生まれた	5
3 . 子どもの本について	8
4 . 子どものために	1 3
5 . ナチスに抵抗し続けた作家	1 9
6 . Erich Kästner	32
7 - 参考文献	3 5
7 - 参考ホームページ	3 5

Erich Kästner (エーリヒ・ケストナー)について

1. 作家エーリヒ・ケストナー

エーリヒ・ケストナーは皆がご存知のように世界中で有名なドイツ人作家である。エーリヒ・ケストナーは風刺作家、少年少女向き作家、劇作家、コメディアン、雑文家としてドイツで沢山の作品を刊行した著名な作家である。彼が書いた“Emil und die Detektive“（『エミールと探偵たち』）という子どもの本は世界で出版された。

まず、エーリヒ・ケストナーの偉大な一生の中で重要な年譜を紹介し、そして、わたしは彼について書きたい理由を述べたいと思っている。

ケストナーの年譜

1899年2月23日、エーリヒ・ケストナーはドイツのDresden（ドレスデン）に生まれた。

1906年9月、ケストナーは七歳になって、ドレスデンの市立第四小学校に入学した。幼いときのケストナーは、下宿人シューリヒ先生に憧れて、将来学校の先生になりたいと思った。ケストナーの母Ida（イーダ）は、息子の将来の学費をためようと、美容師の免許を取って、自宅で開業した。そのときのケストナーが、母の仕事を手伝った。

1912年（十四歳）、ケストナーは、教員養成所の予備クラスを受験して、最優秀

の成績で合格した。翌年の九月に、Fletscher'sche Lehrerseminar (フレッチャー男爵記念教員養成所) に入学した。母の病気のときに、学校の校則を破って見舞いに行き、罰された。このときのケストナーは、学校のあり方に疑問を持ち、学校の先生になるという目標がゆれ始めた。

1917年8月(十八歳)、ケストナーは、徴兵された。この年、十八歳のケストナーが、本当の父親は、Emil Kästner (エミール・ケストナー)ではなく、実の父親は、家族の主治医だったと一つの秘密を知った。

1919年の春(二十歳)、ケストナーは、Abitur (アビトゥア)(国家検定試験)に合格し、戦時特別高校卒業資格を取得した。ドレスデン市の金の奨学金を授与された。彼は、Leipzig (ライプツィヒ) 大学に入学し、ドイツ文学、演劇史、哲学、新聞学、歴史、フランス文学を修める。

1925年(二十六歳)、ケストナーは、論文(Die Erwiderungen auf Friedrichs des Großen Schrift "De la litterature allmende") (『フリードリヒ大王とドイツ文学』)で博士号を取得した。全国の新聞や雑誌に演劇評論や詩を発表することになった。

1927年(二十八歳)、ケストナーは、筆禍事件で新ライプツィヒ新聞社を解雇され、Berlin (ベルリン) で定住することになった。

1928年(二十九歳)、詩集"Herz auf Taille" (『腰の上の心臓』) を刊行した。そし

て、はじめて子ども向けの本『エミールと探偵たち』を書き上げた。

1933年(三十四歳) ケストナーは、亡命をすすめられたが、ベルリンに残った。

“Das fliegende Klassenzimmer“(『飛び教室』)を刊行した。この年の5月10日にナチスは、ケストナーなどの反ナチの作家たちの本を燃やし、執筆を禁止した。ケストナーの本は、図書館でも、『エミールと探偵たち』以外のすべてが閲覧を禁じられた。

1934年(三十五歳)の秋に、“Drei Männer im Schnee“(『雪の中の三人男』)を刊行した。Nazis(ナチス)は、外貨獲得のため、ケストナーの創作活動を国外出版に限り認めた。そのため、ナチスに同調したのではと疑われた。

1937年(三十八歳) 映画『エミールと探偵たち』を上演した。

1943年(四十四歳) Hitler(ヒトラー)は、Münchenhausen(『ミュンヒハウゼン』)の製作にケストナーが関わっていることを知って激怒した。執筆禁止を厳しく命じた。

1950年(五十一歳) ケストナーが、“Das doppelte Lottchen“(『二人のロツテ』)のシナリオを書いた。この映画は、第一回ドイツ連邦映画賞を受けた。

1951年(五十二歳) ケストナーは、Bundesdeutsches PEN-Zentrum(西ドイツ・ペンクラブ)の初代会長に選ばれた。キャバレー“Die kleine Freiheit“(『小さな自由』)劇場を創立した。この年にケストナーの母親イーダが死去した。

1956年（五十七歳）ケストナーは、München（ミュンヘン）市文学賞を授与された。

1957年（五十八歳）ケストナーが、書いた“Die Schule der Diktatoren“（『独裁者の学校』上演した。“Als ich ein kleiner Junge war“（『わたしは子どもだったころ』）を刊行した。父親エミール・ケストナーがドレスデンで死去した。

1958年（五十九歳）ケストナーは、核廃絶を訴えた。ドイツ連邦共和国大功労十字勲章を受けた。

1960年（六十一歳）、Luxemburg（ルクセンブルク）で Hans-Christian-Andersen-Medaille（国際アンデルセン賞）を授与された。

1961年（六十二歳）ミュンヘンで肺結核と診断された。

1974年（七十五歳）ケストナーは、ミュンヘン市の名誉金メダルを授与された。

この年の七月二十九日に食道がんのため、ミュンヘンでこの世から去った。

なぜ、わたしはケストナーを選択したのか。ケストナーについて調べた。調べれば調べほど、彼ほど率直に真実を簡単明白にずばりと言った人はいない。ケストナーは作家として、わたしにとって、最も驚嘆する作家であることが分かった。スイスのすぐれた劇作家 Dürrenmatt（デュレンマット）が、ケストナーは「霧のかかっていないドイツ人」の一人だと言っている。

2 . ドレスデンに生まれて

家庭環境

エーリヒ・ケストナーは一八九九年二月二十三日ドイツのドレスデンで皮革職工の子どもに生まれた。ケストナーの母親イーダはちっとも好きになれない皮革職人の父親エミール・ケストナーと一八九二年の夏に結婚した。エミールは、財布やランドセル、書類かばん、馬の鞍、手綱、乗馬靴、鞭などを、せっせと作った。イーダは、店を切り盛りした。しかし、愛情など、少しも芽生えてこなかった。むしろ、その逆だった。イーダにとって、まじめだけが取り柄みたいなエミールとの生活は、退屈以外のなにものでもなかった。二人の間にできた心の溝は、日に日に大きくなっていくようだった。そうしているうちに、せっかくはじめた店もうまくいかないようになってきた。エミールは、間違いなく腕のよい職人だった。作るものすべてが頑丈で長持ちするものばかりで、展示会でも表彰された。しかし、商人としては、まったくだめだった。売り上げは少ないのに、いい材料を使って、しかも丹精こめて作るのでちっとも壊れない。これでは、お金がたまるわけがない。収入よりも材料費のほうがかかるようになり、やがて借金までした。それがいつのまにかふくらんで、エミールたちは自分たちの店をついに手放さなければならなくなってしまった。母親イーダの兄弟たちは、肉屋が馬商人となったのだが、商売上手だったため、

いずれもとても裕福になった。姉や妹たちも豊かな家に嫁いでいた。その中で、イーダだけが貧乏だったのだ。「なんとかしなくっちゃ」とイーダは思った。そして、イーダは内職をはじめた。エーリヒ・ケストナーはその生活背景で生まれた。ケストナーが生まれてから、母親イーダはさらに拍車がかかった。なぜなら、子どもによりよい教育を受けさせるためには、お金がかかるのだ。かわいい我が子の将来が、自分の働きにかかっている。イーダは、新たな気持ちで、内職に打ち込んで言ったのであった。

母親との関係

エーリヒ・ケストナーは異常な母親っ子であった。母親イーダにとってはケストナーがすべてであった。この一人子のほかには、彼女には何ものも眼中にないといってもよかった。ケストナーのために尽くすこと、それが彼女の唯一のそして最高の生きが이었다。イーダが学問はもとより教養というべきものも身に付けていなかったが、ケストナーが学問したいという気持ちを理解した。ケストナーの望みをかなえるためには、どんなことをも忍んだ。

《かあさんは、すべての愛、すべての夢、あらゆる努力と時間、そして思いのかぎり、生きるという行為の全部を、がむしゃらに狂信的に「ぼく」というたった一枚のカードにかけた。……（中略）……そして、完璧な母親になろうとし、実際にもそうだったので、「ぼく」というカードに、疑問をはさむ余地はなかった。ぼくは、完璧な息子に

ならなければならなかった》“Als ich ein kleiner Junge war“ (『わたしが子どもだったころ』より)

故郷ドレスデン

ドレスデンはエーリヒ・ケストナーの生まれ故郷である。ドレスデンは、ドイツの東中部にあり、かつてのザクセン王国の首都として知られる。エルベ川のほとりに栄えた都で、ザクセン王の居城だった Zwinger (ツヴィンガー) 宮殿や Semper-Oper (ゼンパー歌劇場) などのきらびやかなバロック建築が連なり、街中いたるところに教会や貴族たちの美しい館が見られた。でも、この美しい街並みは、第二次世界大戦のときの空襲で、ほぼ全滅してしまったため、当時の面影は今ではあまり残っていない。ケストナーは、幼いときから生まれ故郷のドレスデンを心から愛していた。なぜなら、ケストナーは、回想記『わたしが子どもだったころ』の中で、ドレスデンについて

《悪くて、醜いものだけでなく、ぼくが美しいものを知っていると
いわせてもらえるなら、それはひとえに、ドレスデンで生まれ育った
おかげだ。なにが美しいかを知るために、わざわざ本で読んで学ぶ必要
はなかったし、学校で教えてもらわなくてもよかった。きこりの子
どもが森の空気を吸うように、ぼくは、美を空気として呼吸しながら
育つことができたのだ》そういうことを語った。

3 . 子どもの本について

『エミールと探偵たち』の誕生

一九二七年の夏に、ケストナーはベルリンに移り住んだ。その時のケストナーは Leipzig (ライプツィヒ) で学生の身分で編集者も務めていた。なぜ彼はライプツィヒからベルリンに移住したのか。それは、ケストナーが文筆家としての運をベルリンでためたかったからだ。ケストナーの運がよかったから、彼が書いた風刺詩が反響を呼んだ。掌編小説、劇評、ルポルタージュなども注目された。でもケストナーは子どもたちのためのものを書く、などという企画はそのなかに入っていなかった。なぜ彼は子どもの本を書き始めたのか。そのきっかけは「世界舞台」誌の発行人からだった。この左翼リベラリズム、平和主義の週刊誌にはケストナーも寄稿者のひとりとして関わっていた。発行人は Edith Jakbsou (エーディト・ヤコブゾーン) 夫人といった。

一九二八年の春の終わりのころ、ベルリンの西はずれにある Grunewald (グリュネヴァルト) のヤコブゾーン夫人宅で、いつものように午後のお茶会が開かれた。出席者は「世界舞台」誌でおなじみの作家や評論家たちだ。みんなは相も変わらずに、土台がすっかり揺らいでしまった Weimar (ヴァイマル) の共和制の行く末について話し合うばかりだった。ケストナーは退屈し始めていた。そんなとき、ヤコブゾーン夫人に、ちょっと相談したいことがあるの、と

広いバルコニーに連れ出されるであった。

ヤコブゾーン夫人は、トレードマークのしゃれた片めがねをかけなおした。

「わたしが子ども向けの本を出しているのはご存じですよ」

「ええ」ケストナーはうなずいた。

ヤコブゾーン夫人は、亡き夫の遺志をついで「世界舞台」誌を発行しているが、それとは別にウィリアムズ・アンド・カンパニーという児童図書の出版社を営んでいた。当時、ウィリアムズ社は、『ドリトル先生』シリーズや『くまのプーさん』など、子ども向けの翻訳書を発行し、高い評価を受けていた。だが、ヤコブゾーン夫人は、いつもイギリスものの翻訳ではさびしいと思っていた。ただ、それらの作品に匹敵するものを書けるだけの才能を持った児童文学の作家が、ドイツに少なく売り出し中のエーリヒ・ケストナーだけであった。

「エーリヒ、あなた、子ども向けのお話を書いてみませんか？」

「ぼくですか？」

《ぼくは、これまで自分で、子ども向けの本を書こうなどと思ったこともなかったので、びっくりしてしまった。それで、どうして、そんなことがぼくにできると考えたのか、夫人にきいてみた》（『児童文学について』より）

すると夫人はこう答えた。

「あなたの短編にも、よく子どもが登場するじゃないの。あなたは、子ども

たちのことをよく理解なさっていると思いますよ。だから、ほんのもう一歩です。今度は、子どもたちについて書くのではなくて、子どもたちのために書いてみたらいかがかしら？」

ケストナーは、首をひねった。

「きっと、難しいでしょうね。できるかなあ」

五、六週間して、ヤコブソン夫人がケストナーに電話をかけてきた。

「例の話、よく考えてくださいましたか？」

そのとき、ケストナー、はずんだ声で答えた。

「考えただけじゃありませんよ。いま、第九章を書いているところです」

その未完成の原稿の一部を読ませてもらったヤコブソン夫人は、自分の目がいかに正しかったかを知った。

一方のケストナーは、子ども向けに物語を書くという試みが、こんなにも自分をわくわくさせるなんと、新世界との出会いにおどろいていたのである。ライプツィヒ時代に、親友のオーザの挿絵で、子どもが登場する短い話を書いたことがあったが、本格的な子ども向けの物語にとりくむのは初体験であった。

ヤコブソン夫人は、そのまま書き続けるようにとケストナーを激励した。できあがった原稿は夫人の予想以上におもしろかった。そして、挿絵を Walter・Trier (ヴァルター・トリヤー) にたのんだ。こうして、『エミールと探偵たち』

が誕生したのであった。

子どもと子どもの本について

一九二九年の秋に、『エミールと探偵たち』は、書店にならべられると、すぐ子どもたちの人気を集めた。やがて、その評判は、ドイツ語圏から世界へと広がり、各国語に翻訳されて、世界中の子どもたちに親しまれるようになった。『エミールと探偵たち』というストーリーは、母一人子一人の貧しい美容師の家族を描いたものだ。ある日、息子のエミールが、母親から預かったお金をベルリンのおばあさんの家に届けに行く途中、汽車の中で、悪い男にとられてしまう。その犯人を、ベルリンに住む大勢の子どもたちが協力しあって、つかまえるのである。この物語の主人公の名前が、ケストナーの父と同じエミール名前だった。そして生活のために懸命に働いている母親の仕事が、イーダと同じ美容師。また、一人の主人公は、ケストナーのいとこの Dora (ドーラ) にそっくりと来ている。つまり、ケストナーは、自分自身を物語の主人公とし、自分のまわりの人々をそのまま作品にひきこんだのだ。この作品にかぎらず、ケストナーの書いた物語や詩などをすべてながめていくと、いくらかの例外をのぞいて、実は、ただ一つの母親像しか描かれていないことに気がつく。タフで、息子のために自分をいくらでも犠牲にして働く母親……。まさしくケストナーの母のイーダと同じだ。そして、素直で、しつけのよい母思いの息子がきまって登場す

る。『エミールと探偵たち』のエミール。同じく児童文学では、“Pünktchen und Anton“（『点子ちゃんとアントン』）のアントン、『飛び教室』の Martin・Thaler（マルティン・ターラー）……。彼らは、子どもころのエーリヒそのものといった感じである。

ケストナーが、《わたしがぜひ知りたいと思うのは、エーディト・ヤーコプゾーン夫人の刺激がなくでも、わたしはいつの日か子どもの本を書く試みをしただろうか、ということです。残念ながらそれはついにわからないでしょう。この世には、答えより問いのほうが多いでしょう。幸い、答えることのできる問いもあります。例えば、すぐれた文筆家は、どんな特殊な才能が付け加わったら、すぐれた子どもの本の著者にもなれるか、という問いだ。それに答えるには、いくらか前もって言うておかなければならないことがあります。第一に、すぐれた文筆家で、すぐれた子どもの本が書けるのに、それに気づかない人がいます。第二に、それが書けるかもしれないけれど、そんなことは「自分の品位以下」のことだと考え、書かない人がいます。そういう人は、かつて子どもだったという資格がありません。第三に、書いてみるけれど、かけない人が少なくありません。そういう実例をわたしは知っておりません。第四に、すぐれた文筆家でないのに、すぐれた子どもの本の著者だというような人は、おりません。第五に、すぐれた文筆家がおとなのために本を書いているのに、思いがけず、その物語が子どもの本になっていることも、よくあります。

さてそこで、わたしの問いにもどります。「すぐれた文筆家は、どんな特殊な才能が付け加わったら、すぐれた子どもの本の著者にもなれ

るか」という問いです。この問いとわたしは幾十年も取り組んできました。今も相変わらずです。それは十分もったもことと思います。なぜなら、成長してくる世代の将来にとって、児童文学の影響は、両親の家や学校の影響とまさしく同じくらい重大だからです。と『子どもと子どもの本について』の中で語った。

4 . 子どものために

子どもと子どもの文学に関する

新聞の編集のかたわら、ケストナーが文学キャバレーのためにシャンソンなどをかいたことは、既に実例を挙げて説明した。それらと同時に、“Pinguin“「ペンギン」に青少年にあてて意味深い文章を書いた。暗い前途に望みを失っている青少年に彼は自分の体験から、励ましと助言を与えずにはいられなかったのである。

まず彼は、「ペンギン」の創刊号（一九四六年一月）に、「賢く、それにもかかわらず勇敢に」を書いた。「破壊されたレンガや瓦の山に囲まれて、とりわけ若い人たちは途方にくれ、なすところを知らない状態にとらえられていた。押しつけがましくなく、彼らに働きかけることが重要であった。」そう彼は書いている。理性を欠いた空々しいかけ声によってドイツ人は亡国におとしいられた。ナチスの警察長官ヒトラーが、敵の戦車が攻めこんできたら窓から熱湯を

あびせよ、と婦人たちに命じたのは、勇気ではなく、狂気に他ならない。一台の飛行機もないのに、防空壕のなかで不屈の勝利の意志をもって戦え、と宣伝大臣 Göbbels（ゲッベルス）が叫んだのも、同様である。十二年間ナチスの暴挙の目撃者になってきたものとして、ケストナーは、ドイツの青少年が賢く、そして勇敢になるように、と訴える。

人間は考える生物であり、知恵と労働によって必要なものを作るのだ。ふくろ小路に追い込まれたからといって、肩をすくめ、手をズボンのポケットに入れて、うろうろしている時ではない。ドイツ人は人間的に感じ、民主的に行動する能力を失っていないことを証明し、新しいドイツを建設しよう、と彼は呼びかける。「ペンギン」の二月号に出た「万里の長城」では、敗戦後の青少年の絶望は前例のないものだ、という声がいよいよ高まるのに対し、ケストナーは自分が第一次大戦から第二次大戦までどんな苦難をなめてきたかを、そして今また全く無一物から出なおしていることを語り、新旧の世代の間に万里の長城のような壁はない、理解し合えない仲ではない、理解し合おうと、手を差し伸べている。

そういう調子でケストナーは子どもの気持ちを切りかえ、明るく、視野を広くするように、いろいろな話題を提供している。「ペンギン」は通貨改革のあおりを食って三年目に廃刊になったが、ケストナーはその後も、子どもと子ども

の文学に関する注目すべき評論をたびたび書いている。彼はこのテーマに熱意を持ち続けていたことを示している。

始業式のあいさつ

そして繰り返し積極的に具体的なアドバイスを子どもに与えている。そこには一貫したモラリスト・ケストナーの考えが表白されている。例えば、「始業式のあいさつ」には、六つの忠告をあげている。第一に「子どものころを忘れてしまわないように！」　多くの人は自分の子どものころを、もう通用しない古い電話帳のように忘れる。だが、地階のない二階三階はない。おとなになっても、子どもであるような人だけが人間なのだ、と彼は言う。

第二に「教壇を玉座とも説教壇とも思わないように！」　先生は何でも知っているわけではない。それを認めるような先生を愛するように。先生は神様でも魔法使いでもない。みんなをはぐくみ育てる園芸家のようなものだ。

第三に「思いやりをもつ人に、思いやりを持つように！」　これはわかりきったことだが、現実には難しい場合がある。第四に「あまり勤勉でありすぎないように！」　これは怠け者にはあてはまらないが、勤勉な者には重要である。人生は学校の勉強だけから成り立ってはいない。ジャンプもダンスも唱歌もできるようでないと、知識で水ぶくれの頭になり、満足な人間でなくなる。

第五に「頭の悪い人をあざけらないように！」　だれだって好き好んで頭

がわるいわけではない。だれだって、自分より賢い人がいることを忘れてはならない。第六に「時には教科書を疑うように！」教科書にどんなにいい人間や勇敢な人間が書かれていても、その人だって一日二十四時間よいことばかりや勇ましいことばかりをしているわけではない。

このあいさつと同じ一九四九年ころ書かれた「アルキメデスの四つの点」も「若い人々に対する短い新年のあいさつ」である。シラクサの天文家・物理学者アルキメデスは「われに支点を与えよ。さらば地球を動かさん」と言ったが、人間に世界を、軸から持ち上げるためではない、正しい軸にはめこむために、ケストナーは四つの点をあげている。

第一に「人間はみな自分の良心に聞くように！」第二に「人間はみなお手本をさがすように！」第三に「人間はみないつも子どもを思いだすように！」第四に「人間はみなユーモアを身に付けるように！」この四つのかなめで、支離滅裂になった世界をきちんと整えるために、めいめいの力で手伝うように、とケストナーは強調する。

上の二つのあいさつで、子どもを忘れないようにということが、特に力説されている。「たいていの人には子どもを雨が差のように忘れ、過去のどこかに置きっぱなしにします。だが、その後の四十年五十年の勉強も経験も、最初の十年間の精神の純度を埋め合わせることができません。子どもはわ

たしたちの灯台です。」

彼は第三詩集「ある男が通告する」の中の詩「卑しさの発生史」で言うように、子どもは文明の公害を受けていない。その純粹さによって大人はたえず心を洗う必要がある、と言うのである。彼はずっと後であるが、「子どもの本について、二、三のこと」という含蓄のあるエッセイで、自分が子どもの小説を書き始めた経緯を回顧し、さらにリンドクレーンとパメラ・トラヴァースとケストナーと、三人の児童文学者が Zurich(チェーリヒ)で児童文学について語り合ったことを思い出して、すぐれた子どもの本を書くには、「自分自身の子どもと、破壊されていない、破壊されることのない接触を持ち続けること」が必要であるという点で、三人の意見が一致したことを特筆している。このエッセイは、フランクフルト・アム・アイン近くの小さい町ロートハイムに新しくできた中学校がエーリヒ・ケストナー学校と命名された時、一九六六年八月二十日、ケストナーが開校式で述べたあいさつである。

その前年すでに、ベルリン南郊ツェーレンドルフにエーリヒ・ケストナー小学校ができていた。それから一九七九年までに、エーリヒ・ケストナーの名を冠する学校は二十五校に達した。ケストナーの子どもの小説と生き方とそして子どもについて考え方が、教育界に共鳴されていることを示すものと言えよう。なお彼は、「子ども、文学、児童文学」(一九五三年)、「だれがいったい子どもの本を書くか」(一九五七年)などの評論で、本格的な作家が子どもの本を書くのを、一段低

いことのように考えていることに抗議すると共に、子どもの話を書くこと、挿絵をかくこと、出版することが、本来の仕事で志を得ない人たちによってなされている現状の改善を望んでいる。彼の調査によると、児童と図書の六割以上が教師や主婦によって書かれていた。「修業を積んだ著者作家」の書いた児童図書は一割しかない。作家が子どもの本に熱意を持たないこと、子どもの本を書くのを品位以下のことと考えている偏見を、ケストナーは批判している。同時に、児童図書を安易に考えている著者や出版者を批判している。

1．児童だけでなく一般の人の評価に耐える児童図書が作られるべきことを、彼は力説する。「児童図書だけを書く作家たちは、作家ではない。彼らは全く児童文学作家ではない。そういうのは、もちろん当たっていない。しかし、この命題は本当だ！」と彼は厳しく言う。2．すぐれた児童読物は、グリムにせよ、アンデルセンにせよ、児童のためだけに書かれてなんかいない、と彼は強く言う。彼自身、次に出た本を「子どもと識者のために」、「子どもと子どもでないもののために」書いている。3．彼の創作や意見が今日の児童文学に大きな刺激を与えたことは、否定できない。彼は国際アンデルセン大賞を受けたのは、当然である。（『ケストナーの生涯』の第二十七章「子どものために」より）

5．ナチスへの抵抗

当時ナチス政権の背景

ケストナーは、ヒトラーのナチス政権に対して抵抗し続けた作家として知ら

れていた。ケストナーはナチスの台頭時代からそれに痛烈な諷刺的批判を加えていたので、ヒトラーが政権を奪取すると共に、『エミールと探偵たち』など、子どもの生活を扱って評判の高かった小説を除いて、「好ましからぬ作家」としてナチスによって詩集や小説を焼かれ、ドイツの国内で禁止された作家の中の一人である。

一九三三年一月三十日、ヒトラーがドイツの首相に選出された。この日で、第一次世界大戦後に生まれた民主的なヴァイマル共和国は、事実上滅亡したといわれる。ドイツは闇の時代に入ったのだ。のちの時代に、ヒトラーの登場は青天の霹靂だったとドイツ人は言った。しかし、これは、ナチス政権を招いたこと責任逃れ以外の何者でもない。ナチスは、突然にやってきたのではなかった。

一九二九年の世界恐慌のせいで、ドイツもほかの国と同じように失業や不況の嵐に見舞われた。ところが、前にもふれたようにドイツは、第一次世界大戦後の賠償金の支払いなどのせいで、国力が弱くて、その問題を解決できなかった。貧困は、国中に止め処もなく広がっていった。当時、失業は、すぐに飢えを意味した。失業者たちは、明日に買うパンにも困り、住む家すらなくした者も多かった。だがそんな時代に逆らように、人気作家ケストナーの暮らしはどんどんよくなっていた。そこでケストナーは、自分のできる範囲内で、貧しい

人々を援助しようとした。ケストナーは、ドイツがガタガタと壊れていくのを黙って見ていられないから、あと数人のボランティアとして協力してくれる仲間を探し、俳優や作家や、映画関係者たちには、もっともっと募金を頼んだようであった。しかし民間の援助活動はすすまず、時代の状況はますます悪くなっていた。政府（社会民主党）はなんらの対策も立てられず、国民の支持を失いはじめた。繰り返し総選挙が行われた。そのたびに極左の共産党と極右のナチスが議席を増やした。共産党を支持したのは主に労働者で、失業した人々も多く票を入れた。一方、ナチスを支持したのは、一般の市民だ。時の政府よりも、もっと強い指導力のある政権を市民は望んでいたのだ。だが、思想的に完全に対立する二つの党は、どちらも暴力的で、流血騒ぎを繰り返した。とくに、一九三〇年の選挙で国会の第二党に躍進してからのナチスの突撃隊はひどかった。いつも徒党を組んで、ドラ声をはりあげ、肩で風を切るように道をのし歩くのだ。時には銃をぶっぱなすこともあった。

『ファービアン』の誕生

ケストナーは、暴力ではなにも解決できないと、さかんに詩や評論で説いた。だが、どんなに警告しても、市民たちへは、なかなか、その声は届かなかった。不況は、坂を下るように、どんどん悪く一方だった。ケストナーが『エミールと探偵たち』などの子供向けの本を出したウイリアムズ社のヤコブソーン夫人

は、原稿料を予定どおり支払えなくなった。また、シュトゥットガルトのドイツ出版組合も、ケストナーの四冊目の詩集の出版を延期しようかと考えた。だが、これにはケストナーは、こういって反対した。

《今は待つべきじゃない。たぶん、もうじき厳しい検討がはじまり、自由に書くことなどできなくなるだから》と語った。

ナチスやそれを支援する人々は、ふたたび強いドイツをつくって、ヨーロッパを支配しようと犯罪的な目標を堂々と声高に叫んでいた。それらの人々の考えや行動について、ケストナーは、小説『ファービアン あるモラリストの物語』で、鋭く諷刺してみせた。この物語の主要な内容：三十二歳の主人公ファービアンは、いんちきが横行する、腐敗しきった大都会に絶望している。しかし、自分の良心だけは失うまいと考え、友人たちと、社会を変えようと努力する。だが、病んだドイツをどうやって救えよう。ファービアンは次第に虚無的になり、いかがわしい場所に出入りして憂さをはらすのだった。そして、心の支えだった恋人が、映画に出してもらうため、関係者に身を任せたことを知り、絶望するのだ。失意のうちに故郷に戻ったファービアンは、そこで、川に落ちた少年を救おうとして、泳げないのににもかかわらず飛び込み、溺れ死ぬ。

インテリのモラリストは、人道的な心を失ってしまった時代の流れの中で、もはや泳ぎ渡ることはできなかったというわけだ。

この“Fabian“『ファービアン』は、《一九二〇年代末から三〇年にかけての大

恐慌時代のドイツ、とりわけベルリンを諷刺した傑作》(キンドラー編『文学辞典』より)といわれた。この小説は近隣の国々に近づいている暗雲を予告し、ヒューマニズムを踏みにじろうとしている者たちに対しての、当時、最も挑戦的な小説だったのだ。本は、出版され店頭にならぶや、たちまち売り切れた。新聞や雑誌もこぞって賞賛した。

でも、この『ファービアン』には、たくさんの警告が含まれている。例えば主人公ファービアンが見る夢の中で、ケストナーは、ドイツがこのままナチスについていったらどうなるのかを描いてみせた。《ファービアンは巨大なドームの中にいた。見上げると、一面の屋根だった。通気窓や天井の梁から、さかんに射撃の雨が降ってきた。負傷者たちが大勢、破れた屋根からぶらさがっていた。梁の上では、屈強な体格の男たちが二人で格闘していた。お互いの首をしめ、かみつきあっていたが、しまい一人がよろめいて、その拍子に二人とも墜落してしまった。二人の空っぽの頭蓋骨が、地面にたたきつけられて割れる乾いた音が響いた。ドームの天井の下では、飛行機がうなりながら飛び、火のついた松明を家々の上に投下した。家が次々に燃え出し、緑色の煙がもうもうと立ちのぼった》。これとそっくりな光景が、十数年後には、ドイツの町のいたるところで見られるようになる。だが、ケストナーがこの物語を書いたころに、これを読んで、どれだけの人は自分たちの運命を予想できたろうか。

帝国議事堂放火事件

一九三二年に入ると、時代はさらに悪化した。ナチスのデモが日増しにさかんになった。それに対して、ケストナーは詩「行進の歌」で評した。ケストナーが反ナチスの運動に積極的に参加したのも、このころである。反ナチス連合の集いで、詩を朗読し、Heinrich・Mann(ハインリヒ・マン)やErich・Mühsam(エーリヒ・ミューザム)たちとの人権擁護同盟でも活躍したりした。また大統領による「緊急命令」(ヴァイマル共和国憲法第四十八条)によって、新聞や雑誌の発行が禁止されると、それに反対するドイツ作家保護協会の委員会にも出席した。しかし、もはやだれも、ナチスが巨大になるのをとめることはできなかった。一九三二年の七月の総選挙で、ナチスは、得票数千四百万票を得て、五百八十四議席中二百三十議席を占め、ついに第一党となったのだ。

一九三三年二月二十七日に、帝国議事堂放火事件が起きた。ナチス政府は、これをすぐに共産党の仕業と決め付けて、その夜から翌日にかけて、共産主義や社会主義者の一斉検挙にのりだした。共産党の指導者を逮捕するためのリストは、ずいぶん前から準備されていたので、ナチスの行動は早かった。彼らを住まいから引き立てるや、拷問にかけ、まだ仮設の強制収容所に次々と放りこんでいった。そんなナチスのあまりにすばやい動きに、外国では疑いの目を向けている。もちろんドイツ国内でも、反ナチスの人々は、放火事件は、ナチス

が敵を弾圧するために、自分たちで仕組んだ陰謀ではないかと考えた。その真相はわからなかった。確かなことは、火を放ったのが、精神に異常をきたしていたオランダの一人の共産党員だということだけだ。あの共産党員は、単に「のろし」をあげようと思って、火をつけたのだという。もちろん、共産党にはなんの関係もなかった。しかし、放火した人が共産党員だったことは、ナチスには十分な口実になった。指導者たちの寝込みをおそって、連行さえできればよかったのだから。

二月二十八日、放火事件の翌日、ヒトラーは「国民と国家を守るための緊急令」を發布して、ワイマール憲法の基本法を実質上廃棄し、反対派を勝手気ままに弾圧できるようにした。そして突撃隊や親撃隊の暴力で極端な選挙干渉を遭っていた。しかし、一九三三年三月五日の総選挙でナチスの得票は四三・九パーセントにとどまり、単独では総議席の過半数を占めることができなかった。ナチスは二百八十八議席を得たが、社民党は前年秋と同数の百二十一議席を保っていた。共産党はすでに禁止されており、議会に出られないことが分かっていたにもかかわらず、同党から八十一人の代議士が選ばれるという異常な結果を産んだ。それのためにだけナチスは選挙後むちゃくちゃな暴力をふるって反対勢力を圧殺した。

ナチスに戦い続けた

この放火事件をきっかけに、それまで反ナチスの態度を明らかにしていた文化人たちは、外国へあわてて脱出しはじめた。ナチスにつかまる恐れがあったからだ。一方、ケストナーはベルリンに戻って、国内にとどまる気持ちを変えなかった。まだ残っていた仲間たちに、亡命なんかしないで一緒に戦おうと説得して歩いた。

このせいで、多くの友人を危険な目にあわせることになり、ケストナーはあとでひどく後悔することになるのだが……。

《ナチスに立ち向かっていくのは、僕らの義務じゃないか。とにかく、僕は残るよ、と友人たちにいった。もしも、あのとき僕の説得に応じていたら、たぶん、みんな殺されていただろう。ファシズムの犠牲者リストに名前を連ねていただろう。僕は、そのことを思い起こすたびに背筋が冷たくなる》(『亡命について』より)

しかし、そうまでして、ケストナーをドイツに踏みとどまらせた理由はなんだったのだろうか？はじめはナチスに対する認識が甘かったにしても、じきに、ケストナー自身も、ナチスの暴虐のひどさにいやでも気づかされる。それからでも、亡命をしようと思えばできたはずだ。国外に何度か出るチャンスはあったのだ。そのことで戦後、ケストナーは多くの人から、こういう質問を受けるはめになった。《ケストナーさん、あなたはどのようにして、ドイツを離れなかったの

ですか？》ケストナーは、それに答えるように「余計な質問に対する当然の答え」という題の、こんな詩を書いている。

わたしはザクセン生まれのドイツ人。

故郷が、わたしを放さない。

わたしは、ドイツ育ちの一本の樹。

時がくれば、ドイツで朽ちる。

(『亡命について』より)

ケストナーは自分の国を愛していたし、なによりも母親の存在があった。母親想いのこの息子が、すでに六十歳になったイーダを置いて、自分だけ外国へ逃げるなどできるはずがなかった。しかし、ナチスは早くから、ケストナーを敵と見ていた。ナチス体制に反対していたほかの多くの人々のように、彼も強制収容所に入られたり、あるいはすぐ殺されていたかもしれない。いや、むしろ、ケストナーが生き延びたのは奇跡のようなものだったのだ。

五月十日に焚書事件があった。ケストナーの詩集「ファービアン」は焼かれたが、子どもの小説は焼かれなかった。ケストナーは焚書と共に、ドイツ国内での作品発表を禁止された。それでも外国での発表、出版は許された。それは外貨獲得に役立つので、ナチスのためでもあった。それで、彼は生活に窮することはなかったようである。

焚書は作家の生命を断とうとする暴挙であるから、ケストナーは憤激に耐え

なかった。彼はこの事件から二十五年目の同じ日、一九五八年五月十日、ペンクラブのハンブルクでの会議で「焚書について」という痛烈な講演をしていた。終始ナチスの所業を見守り、焚書を現場で見た人の証言である。彼が意図したとおり、ナチスの野蛮きわまる破壊行為の生き証人の役割を果たした一例であった。

ナチス政権時代に、ケストナーは何度も執筆禁止された。だが、ケストナーはその時代の中で、たくさんな作品を刊行した。(一九四五年までケストナーの本は専らチューリヒで刊行することになった)一九三三年に『飛び教室』を刊行した。一九三四年に『雪の中の三人男』と Emil und die drei Zwillinge (『エミールと三人のふたご』)を刊行したため、ケストナーは国家警察により逮捕されたが、即日釈放された。……ケストナーはナチス政権に対する抵抗し続けた。

ケストナーは晩年もナチスに戦い続けた。六〇年代の後半に、ナチスの犯罪の時効成立に関して議論が高まると、ケストナーは、ほかの作家たちや、評論家、法律家、人文科学や自然科学系の学者たちと共に、真っ先に反対を唱えた。さらにヴェトナム戦争に対しても抗議を続け、一九六八年には、『ヴェトナム戦争に反対して』という辞を、反戦運動に寄せた。やがて、ケストナーたちの努力が報われ、ナチス犯罪の時効成立は見送られた。また、ヴェトナム戦争も、アメリカ軍が撤退して、ようやく終わりを告げた。

戦争について、ケストナーはこう述べている。《それにしても、人間というのは不気味な存在だ。義母殺しは首をはねられる。これは昔からの分かりやすい習慣だ。ところが、何万人もの人間を殺した者には、銅像が建てられる。通りには彼の名前が残り、学校の子どもたちは、彼がいつ生まれて、いつ穏やかな永遠の眠りについたかを暗記させられるのだ》。

ヴェトナム戦争の挫折のあと、さすがに銅像が建つことはなかったが、その十二年後、湾岸戦争で勝利をおさめたアメリカの将軍たちは、テレビを通じてヒーローになった。ケストナーはその晩年、ヴェトナム戦争の終結など、ささやかな勝利を得るものの、気持ちが晴れることはなかった。「力強く、知的で、強い意志を持った作家」として、ケストナーはペンの道を歩きはじめ、時と未来を見据え、健全な人間の理想を訴えて、その生涯をかけて、人々の啓蒙に尽くしてきた。だが、ケストナーは、自分のような存在は少数派にすぎないのだと認めずにはいられなかった。

ケストナーの晩年

ケストナーは、人生の終わりの数年間は、裕福な生活とお酒好きの中に逃れた。若い世代にとって、ケストナーは、もはや社会ロマン派の作家であり、児童文学作家にすぎなかった。彼らには、なぜケストナーがナチスに禁じられたのか、分からなかった。ケストナーの全体像は、学校でも家庭でも、教えられ

ることはなかったのだ。

今日のケストナーといえは児童文学作家としてしか確立された地位を得ていない。だが、それだけでは、今世紀最大の時事評論家として活躍してきたケストナーに対する、十分な評価とはいえないだろう。激動な時代を生き延びて、人々に自由と平和の意味を訴え続けた、この作家を忘れてはならない。

ケストナーは、多くの栄誉が授けられた。一九五六年にミュンヘン市文学賞、一九五七年には、最高の現代ドイツ文学に贈られる Georg・Büchner(ゲオルク・ビュヒナー)賞を授与された。一九六〇年には、子どもの本の分野でのノーベル文学賞と称される国際アンデルセン賞を、さらに一九六八年には、ドイツ・フリーメーソン賞と共に、レッシング指輪を授与された。また、一九七〇年には、ミュンヘン市の文化名誉賞を、一九七四年には、ミュンヘンから名誉金メダルを贈られた。これらの賞は、ケストナーの晩年を栄光で飾ることにはなかったが、彼にとってなぐさめにはあまりならなかった。これらの栄誉は、昔まかれた種から生じた実を収穫しているにすぎない、と彼はわかっていた。称えられているのは、モラリストとして、ヒューマニストとして神話化されたケストナーであり、現役の作家に贈られているのではなかった。

詩人としてのケストナーの最後の作品は、一九五五年に出版された詩集、『十三』である。この時期から、ケストナーの心のどこかに、あきらめに似た気持

ちが芽生えはじめたのは事実だ。この『十三月』は、ケストナーの告別の詩なのである。母が死んで数年たち、父が亡くなる二年前、そして自分自身の死の十二年前に、ケストナーは一度、自分の人生の軌跡をたどってみたかったのだろう。ちょうど、戦後の忙しい日々が一段落したときでもあった。

ケストナーは、ナチスによって一九三三年に書くことを禁止された。戦後すぐに、その中途でとまった時点からやり直すことは簡単ではなかった。第三帝国は、彼から人生の中心とも言うべき十二年の歳月を奪った。創作活動の最も熟した、かけがえのない日々をとりあげてしまった。もしも、その時間があつたら、ケストナーは自分の才能を、もっとふんだんに生かすことができたろうに。失われた時や力や勇氣は、もともにもどることはないと認めるのは、ケストナーにとってつらいことだった。ケストナーは知っていた。

人間の「十二月」の次は、「一月」がめぐってこないことを。

「十三月」は、おしまいの方なのだ。

一九七四年二月二十三日、エーリヒ・ケストナーは七十五回目の誕生日を祝い、同年の七月二十九日早朝、亡くなった。食道癌だった。

ナチスに抵抗し続けることについては、殺される危険が多かったのに、ナチス・ドイツに妥協せずに十二年間も踏みとどまっていた、その大胆不敵さは、無謀と言っていいくらいである。多くの人はどうして亡命しなかったのか、と

彼に質問しているのは当然である。それは独裁主義へ果敢な抵抗であったが、同時にきわめて賢い柔軟な抵抗であった。抵抗運動の歴史において最も注目すべき人物である。ケストナーがそれをどのように耐え通したかを、私はたどってみたいと思ったのである。

6 . Erich Kästner

Erich Kästner ist einer der bekanntesten Kinderbuchautoren. Seine Kinderbücher sind weltbekannt. Die meisten Kinder kennen seine Bücher und haben wenigstens eines davon gelesen.

Erich Käster wurde am 20. Februar 1899 in Dresden (Deutschland) geboren. Von 1903-1913 besuchte er die Volksschule. Er wollte eigentlich Lehrer werden, doch wegen des Krieges musste er seine Ausbildung abbrechen. 1917 wurde er zum Militär eingezogen.

1927 zog Erich Kästner nach Berlin um. Im Jahr 1928 wurde er als Schriftsteller bekannt. Ab diesem Jahr erschienen seine Bücher, teils für Erwachsene, teils für Kinder. Den größten Erfolg hatten Kästners Kinderbücher, so zum Beispiel "Emil und Detektive", das im Jahr 1928 erschien.

Die bekanntesten Bücher von Erich Kästner sind: "Das doppelte Lottchen" (1949), "Emil und die Detektive" (1928), "Pünktchen und Anton" (1931) und "Das fliegende Klassenzimmer" (1933). Diese Bücher gehören zu den Lieblingsbüchern vieler Kinder.

Weitere Kinderbücher von Erich Kästner: "Als ich ein kleiner Junge war", "Das Schwein beim Friseur", " Das verhexte Telefon", "Der 35. Mai", "Der kleine Mann", "Der kleine Mann und die kleine Miss", "Die Konferenz der Tiere", "Emil und die drei

Zwillinge“.

Erich Kästner hatte als Autor auch Probleme, vor allem wegen des Krieges. 1933 wurden seine Bücher von den Nazis verbrannt. 1934 und 1937 wurde Kästner sogar verhaftet und 1942 wurde ihm das Schreiben total verboten.

Doch Erich Kästner hat nach dem Krieg weiter geschrieben. Für seine Bücher hat er viele Preise und Auszeichnungen erhalten. Einen wichtigen Internationalen Jugendbuchpreis erhielt der Schriftsteller im Jahr 1969 in Luxemburg: die Hans-Christian-Andersen Medaille.

Auszeichnungen und Preise

- * Bundesfilmpreis für “Das doppelte Lottchen“ (1950)
- * Literaturpreis der Stadt München (1956)
- * Georg-Büchner-preis (1957)
- * Hans Christian-Andersen-Medaille des Internationalen Kuratoriums für das Jugendbuch (1966)
- * Erster Preis (“Goldener Igel“) im internationalen Humoristenwettbewerb der bulgarischen Jugendzeitung “Narodna Mladesch“, Sofia (1966)
- * Literaturpreis der Deutschen Freimaurer, Überreichung des Lessing-Rings (1968)
- * Kultureller Ehrenpreis der Landeshauptstadt München (1970)

* Goldene Ehrenmünze der Landeshauptstadt München (1974)

Erich Kästner ist seit dem Jahr 1961 krank gewesen. Im Juli 1974 ist er im Alter von 75 Jahren gestorben.

Erich Kästner hat sein ganzes Leben lang versucht, ein bisschen Kind zu bleiben. Er erzählt seine Bücher aus der Sicht eines Kindes und in der Sprache der Kinder, sogar ein bisschen frech.

Kästners Kinderbücher sind sehr einfach und klar geschrieben. Sie sind leicht zu verstehen. Alle Bücher von Erich Kästner sind lustig und witzig geschrieben. Es gibt auf fast jeder Seite etwas zu lachen. Es passieren auch immer wieder Überraschungen.

(<http://www.restena.lu/primaire/bourscheid/kastner.htm>.(2003-02-22)より)

7 - 参考文献

著書 『ケストナーの生涯』 著者 高橋健二

出版社 駸々堂出版株式会社

著書 『Erich Kästner ケストナーナチスに抵抗し続けた作家』

著者 クラウス・コードン 訳者 那須田 淳 木本 栄

出版社 (株)偕成社

7 - 参考ホームページ

<http://www.restena.lu/primaire/bourscheid/kastner.htm>. (2003/01/07)